

反貧困ネットワーク事務局長

湯浅誠

仕事場近くの雑木林に佇む。いつも胸には反貧困キャンペーンのシンボル「ヒンキー」バッジ

「反貧困」をつなぐパーカー姿の論客

「貧困」は、「格差社会」という流行語に隠されてきた。

「たしかにある」と確信できたのは、現場に向き合ってきたからだ。

「貧困は自己責任じゃない。政治の問題として解決されるべきです」

文 榊嶋秀吉 写真 菊地 健

もしかしたら、あなたが今日、街ですれ違った青年は日雇い派遣のネットカフェ難民かもしれない。電車で隣り合った女性は、DV被害から逃れて昼夜パートを掛け持ちしつつ子育てをしているシングルマザーかもしれない。そして公園で見かけた中年男性は、働きたくても仕事がない心の病を患った生活保護受給者かもしれない。

憲法は「健康で文化的な最低限度の生活」を保障する。だが、ワーキングプアに代表される貧困が静かに、しかし確実に蔓延している。それなのに長い間、この国の政治は彼らの存在を直視してこなかったと湯浅誠の目には映っている。

社会から見えないまま放置されてきた人たちに光を当て、救済を求める声を自ら上げさせようと、「反貧困ネットワーク」が昨年誕生した。野宿者やDV被害者、精神障害者、派遣労働者などの問題に取り組む市民団体や労働組合の関係者、それに弁護士らが個人の立場で参加する。その舵取り役である事務局長が湯浅だ。

湯浅は学生だった1990年代半ばから野宿者の支援活動を始めた。現在は、元野宿者など生活苦に喘ぐ人々を手助けするNPO法人「自立生活サポートセンター・もやい」の事務局長でもある。これまで1000人以上の生活保護申請に立ち会い、アパート入居時に必要な連帯保証人を、

多いときで300人から引き受けた。弁護士や司法書士とホームレス相手の法律相談も行っている。現場で当事者と関わりながら執筆活動で貧困の現状を世論に訴えるのが、この2、3年の湯浅の活動スタイルだ。

「貧困は「ない」ではない」「見えない」だけだ

その発信基地は埼玉県所沢市にある安アパートの2DK。壁を覆い尽くす書棚には古今東西の思想家に交じってレーニンの著作も並ぶ。書棚が途切れた机の前の壁にはアウシュビッツで犠牲になった人たちの顔写真が載ったポスターが無造作に張られ、ノートパソコンが置かれた机の下では椅子のキャスターに表を破られた畳床が露出している。今年の正月はこの殺風景な部屋で、一度転んだら落ちていくしかない今の社会を「滑り台」にたとえた著書の原稿を書き続けた。

講演活動も多い。3年前から北九州市で生活保護を受けられなかった男性が死亡する事件が相次いだ後、日本弁護士連合会が貧困問題対策に乗り出したこともあって、全国各地の弁護士会から依頼が相次ぐようになった。労働組合や市民団体が

らも呼ばれる。その合間を縫うようにもやいで週1回、生活相談を受けているが、困った人たちからの相談はメールや携帯電話へと時間を選ばずに飛び込んでくる。

湯浅は、生計を立てるという意味での定職を持つていない。もやいで活動も無給だ。敢えて職業を特定するならば、プロの運動家ということになるか。湯浅はいま、社会運動として貧困問題に取り組んでいる。その手法の特徴は、様々な分野の支援団体をつなぐネットワーク。それによって、個々の団体では持ち得ない大きなパワーを生み出そうとしている。

反貧困ネットワークの会員でもある首都圏青年ユニオンの河添誠書記長は「私たちも労働組合運動として非正規雇用の若者を組織している。その中には生活保護を受けている者もいるが、貧困を運動の課題として横断的に把握してこなかった。シングルマザーや障害者の団体と一緒にあって貧困の問題を社会にアピールしないといけないという発想がなかったのです」と語る。そしていまの湯浅の活動について、「貧困という、ふだん生活していると思えないものを見えるようにしている。それは、貧困が見えるようになるメガネを渡し続ける作業で、私もそのメガネを渡された一人です」と付け加えた。

そもそも湯浅が貧困という切り口を見つけたきっかけは、フランスから来た女子留學生の話だった。もやいでボランティアをしていたその留學生が、90年から13年間の朝日新聞の見出しをデータベース検索したところ、国内の貧困を取り上げた記事は7件しかなかったという。2006年のことである。

これをきっかけに貧困について考え始めていたところに、当時、総務相だった竹中平蔵の鼎談記事を目にした。この中で竹中は「格差ではなく貧困の議論をすべき」だが、「社会的に解決しないといけない大問題としての貧困はこの国にはない」と言い切っていたのだ。「たしかに格差が問題なのではないが、貧困はある」。そう思った湯浅はすぐに「格差ではなく貧困の議論を」という論文を書き上げ、弁護士や社会福祉施設・団体、労組などの関係者を読者に持つ専門誌「賃金と社会保障」に発表した。

編集長の浦松祥子は、その論文を一読して驚いた。「実践経験に裏付けられた信念があり、文章を書く能力、表現力もある。なによりも、言っていることに嘘がない。この人は、自分が本当に納得して、真実だと思っていることだけをストレートに言っているという印象」がとて強かったからだ。浦松は即座に単行本の執筆を依頼した。

1年後、浦松が発行人となった『貧困襲来』が刊行された。湯浅はこの本の中で、働く者を貧困へと追いやるメカニズムを「5重（教育課程、企業福祉、家族福祉、公的福祉、自分自身から）の排除」と名付けて解き明かし、生活苦に陥った人

を食い物にする人材派遣会社や消費者金融などの「貧困ビジネス」にメスを入れた。湯浅が貧困問題の論客として注目されるようになったのは、この本が出てからである。

湯浅は東大大学院法学政治学研究所の博士課程を終えた、いわゆるエリートだ。「組織が嫌いで、就職は考えたことがなかった」が、企業に勤めていたらいまごろは高給取りになっていたことだろう。彼と一緒に活動した者は口を揃えて、彼の頭の良さと実務能力の高さを讃える。だが、その一方で「人を見下すところがない。人との付き合い方が水平的」（河添）との人物評も共通している。

障害を持つ兄への幽痒さ

「堂々とすればいい」

私立武蔵高校で湯浅の一年先輩だった国際交流NGO「ピースボート」共同代表の川崎哲には忘れられない場面がある。

2人は高校で文化祭の実行委員を一緒にやった親しい仲だった。一浪した湯浅より2年先に東大へ入学していた川崎は反原発や反天皇制などの運動に加わり、春の一日、キャンパスで学生にピラを配っていた。そのとき、「おー、川崎、久しぶりじゃん」と湯浅が声をかけてきたのだ。

「ピラ撒きなんかしているよ、友だちがいなくなるんですよ。いくら高校時代に仲が良くても疎んじられるのがふつうなのに、久しぶりに会った湯浅はまるで昨日まで会っていたかのように立ち話

をして去って行きました。その姿がとても新鮮でした」と川崎。高校のころから湯浅は誰とでも対等に口を利き、目上さえも呼び捨てにしたが、川崎は「生意気さというよりは、清々しさを感じさせた」と言う。

この川崎との再会が、その後の湯浅の人生を方向付けることになった。

湯浅が大学2年のときにイラク軍がクウェートに侵攻し、翌91年1月に湾岸戦争が始まる。首都圏の大学生が集まって始めた反戦運動に湯浅は参加するが、そのリーダー格が川崎だったのだ。その後、川崎が外国人労働者問題をきっかけに野宿者の支援活動を始めると湯浅も続いた。

川崎によると、湾岸戦争反対運動の中核メンバーには誰もが認めるインテリが2人いた。一人は湯浅。もう一人は、湯浅の高校時代からの親友だった。2人は吉本隆明や柄谷行人といった現代思想家の本を読んでは語らうという、有名進学校の中でも早熟な若者だったようだ。だが、川崎が野宿者の支援活動を始めると、東大で仏文学を学んでいた親友はフランスへ留学してしまった。「親友は」純粋インテリだったけど、湯浅はどんな人ともすぐ友だちになれちゃうところがあつた。そこが2人の違いだった（川崎）ようだ。

湯浅自身は自分の性格について、「人との関係ができるよ、それ自体に興味が出てきて泥臭いと

大学院での研究テーマは戦前の左翼勢力。「転向せず、後退しながらも踏みとどまろうとした人たちの知恵を学んだ」。生活保護を申請する相談相手には役所の水際作戦に「負けない戦い」をアドバイスする

ころにも入ってしまってしまふ」と分析してみせるが、その水平な眼差しは家庭環境と無縁ではなさそうだ。

湯浅の3歳年上の兄は進行性の筋萎縮症という難病を患う重度障害者である。彼の記憶に、元気に歩き回る兄の姿はない。父親は日本経済新聞の記者、母親は小学校の教師だった。養護学校から帰ってきた兄の相手をするため、ボランティアのお兄さんたちが家に来てくれて、家政婦さんが作る夕飯と一緒に食べることもあったという。

兄にまつわる苦い思い出がある。小学校3、4年のころのことだ。湯浅はときどき養護学校へ兄を迎えに行つたが、車椅子を押して家に帰つてくるときに兄は裏道を通りたがった。「もつと堂々とすればいいじゃないか」と、子ども心に腹を立てたという。そして湯浅はわざと人のいる方向へ車椅子を押そうとして兄とケンカになった。

「兄貴は誰かから意地悪や差別をされていたわけではないと思うけど、人に見られたくないという意識が内面化していた。自分にとっては、兄貴の存在というより、兄貴のいる環境が大きかったですね。差別される側じゃないですか。そっちの側にいたんですから」

博士号を捨てて運動へ 決断ではなく自然な流れ

母・尚子ひなこの目に映る湯浅は、手のかからない自立の早い子だった。「兄と一緒に育っちゃった、って感じですね。ああしなさい、こうしなさいと言った記憶がありませんから」。兄の世話で忙しかった母は湯浅が寝静まった後に日記をこっそり読むことで、その生活ぶりを理解していた。

こうした家庭環境で高校まで過ごした湯浅は、何事も周囲に相談しないで自分だけで決めてしまふようになった。彼の性格のもう一つの側面だ。

大学院の博士課程を単位取得退学したときも、結論だけを伝えた指導教授をして「あなたは愛されない性格だから気をつけたほうがいい」と言わしめた。いままで付き合った女性からも「何を考えているのか分からない」とよく言われたらしい。

学者になることを湯浅が諦めた直接のきっかけは父親の死だった。腎臓がんと診断されてから大手術を経て亡くなるまでのおよそ1年半、湯浅は下宿先の練馬区から実家のある東大和市へ移り、ショックのあまり体調を崩した母親を支えた。このころは渋谷での野宿者支援活動と並行して、炊き出しに欠かせない米を農家から集めるための「フードバンク」を立ち上げる一方、もやいの設立にも動いていた。

「それまでは大学と活動だったのに、家と活動になった。大学はだんだんと遠のいて、いよいよ博士論文を書くというときに『やっぱり無理だ』と分かった。どこかで決断したというわけじゃない」。本人の言葉を借りると「ズルズルと流されちゃった」のだが、湯浅の生い立ちを辿ると、水が高さから低きに流れるように一番無理のない結論だったように思えてくる。

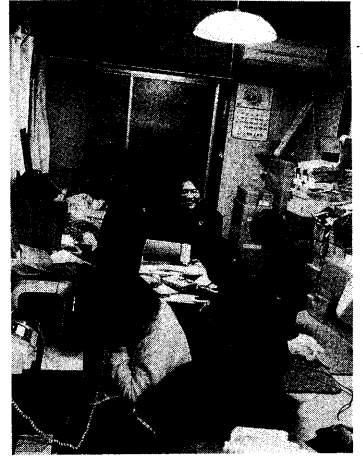
ただ、大学院を出た後で決断したことが一つだけある。奨学金に代わる生活の糧をどうやって得るかだ。「塾の先生でもするか、それとも活動で食っていくか。野宿の当事者は生活がかかっているけど、こっちはかかってない。そうやって当事者に関わることをアンバランスを感じた」という湯浅は、結局、当事者の人たちの生活を底上げし、そこに自分の生活も組み込む決意をした。

いったん決心すると、行動が素早いのも湯浅の



一面だ。さつそく、フードバンクと一緒に立ち上げた中村光男ひなこたちが野宿者のための仕事づくりとして始めていた古着リサイクルショップの「あうん」に乗り込んで便利屋部門を起こした。あうんはそのころ、野宿者が食べていくのに最低限必要な月3万円の収入を目標としていたが、湯浅はそれを「8万円」に引き上げて、あちらこちらから仕事を取ってきた。

湯浅が連帯保証人になった人たちの引越しゃリフォーム作業などを次々やった結果、7、8万円の月収を確保できるようにはなった。だが、奨学金の蓄えを食いつぶす「生活保護基準以下の暮らし」で、自前でようやく食べるようになったのは執筆や講演などが増えたこの一年ぐらいいのこと



この冬、2着あったコートを電車の中に置き忘れたので、寒空の下でもヨットパーカーにジャケットという出で立ち。着たきりで1カ月が過ぎたところから、もやいのスタッフに「臭い」とからかわれ始めた

らしい。

湯浅は、自分の活動は5年区切りで変化していると感じている。95年からの最初の5年間は渋谷の路上にへばりついた。00年からは、フードバンクやもやいをつくって野宿者からDV被害者、精神障害者らへと対象を広げた。そして、05年に最初の著書『本当に困った人のための生活保護申請マニュアル』を出してからさらにステージが大きくなった。反貧困ネットワークはその延長線上にある。

しかし、こうしたある種のステップアップに対して、「目の前の問題を放り出して、反貧困もないものだ」という声が野宿者のための炊き出しを長年続けている人からは聞こえてくる。湯浅は敢えて反論しないが、大学時代から付き合いがあり、もやいを一緒につくった稲葉剛代表は次のように語る。

「支援者というのは、いい人に見られたいという気持ちはどこかにあるものだが、湯浅には見事なまでにない。そもそも、当事者が立ち上がるべきというのが彼の考えなので、支援者という感じではない。その上、団体に対する帰属意識もない。彼にとって一番重要なのは運動で、その運動は日

■ゆあさ・まこと

- 1969年 東京都世田谷区に生まれる。
- 85年 私立武蔵高校に入学。文化祭の実行委員をしたり自主映画を制作したりする。
- 89年 1浪して東京大学(文1)に入学。
- 91年 湾岸戦争に反対する学生の団体「ピース・チェーン・リアクション(平和連鎖反応)」に参加。3月に市民調査団の一員としてイラクへ。
- 93年 大学院進学を決意し、大学の授業に出席するようになる。
- 95年 学部を卒業(6年在籍)し、東京都立大学大学院へ(1年で中退)。このころから渋谷で野宿者の支援活動を始め。
- 96年 東京大学大学院法学政治学研究所(日本政治思想史専攻)に入学。
- 98年 同科博士課程へ進学。
- 2000年 1月に父親が腎臓がんで手術。5月にフードバンクを設立し、共同代表(2年間)になる。
- 01年 4月に父親が逝去。5月に「もやい」を設立。
- 02年 渋谷での野宿者支援を活動路線の対立によってやめる。
- 03年 3月に東京大学大学院博士課程を単位取得退学。7月に「あうん」で便利屋事業を始め、代表になる。
- 07年 7月に「人間らしい暮らしを求めてつながろう」東京集会を開き、10月に「反貧困ネットワーク」を発足。12月には首都圏青年ユニオンの河添誠書記長と生活困窮者の互助組織である「反貧困たすけあいネットワーク」を設立。
- 08年 3月29日に反貧困ネットワーク主催の「反貧困フェスタ2008」を千代田区立神田一橋中学校で開催する。
著書に『本当に困った人のための生活保護申請マニュアル』(同文館出版、05年)、『貧困襲来』(山吹書店、07年)、編著書に『もうガマンできない! 広がる貧困』(明石書店、07年)。『反貧困——「すべり台」社会からの脱出』(岩波新書)を4月に出版予定。

々進化していくものと考えている。『理念があつて運動があれば、別にオレじゃなくてもいいじゃん』と、ある程度の基盤を作ったら自分は次のところへ行ってしまう」

孤独死した同世代の若者
「自分だけは忘れない」

じつは湯浅が便利屋を始めて生活と活動を一体にしたのは、あうんの中村の生きざまに影響を受けたからだ。中村は山谷で長年、日雇い労働者運動をしてきた叩き上げの活動家である。ネットワーク型のアイデアも中村から授かった。中村が「支援団体がそれぞれ一国一城の『お山の大将』でいたのでは限界がある」とフードバンクづくりを呼びかけ、それに湯浅が共鳴したのである。

その現場の「師」である中村は、「反貧困ネットワークも、当事者のしんどい現場と離れているわけではない。現場が直面しているドロドロした問題を、その取り組みの中でどうすくい上げていけるかが課題だ」と語り、湯浅のこれから目を凝らしている。

過去の経験を踏み越えて前へ進み続けられる者だけが運動家たりえる。湯浅は、連帯保証人になった同年代の若者がアパートの部屋で孤独死したとき、世間から忘れられても自分だけは覚えていようと骸から外した指輪を自らの指にはめた。そうした繊細さを持ち合わせてはいるが、ただの心優しい活動家ならば渋谷の路上を離れることはなかっただろう。

まだできたばかりの反貧困ネットワークだが、湯浅はいつか政府に貧困対策基本法を作らせたいと考えている。とりあえずの目標は、首相の所信表明演説で貧困問題に触れさせることだ。もやいが設立5周年記念につくった文集に湯浅は「もやい(は)自分のやりたいこと、言いたいことを社会的承認と接続させるのに便利な回路」と書いた。いま、反貧困ネットワークという新たな回路を得て、社会にどう訴えていくのか。その第一弾が今月29日に都内の中学校で開くイベント盛りだくさんの「フェスタお祭り」だ。

(文中敬称略)

樺嶋秀吉

1957年札幌市生まれ。早大卒。毎日新聞記者、書籍編集者を経てジャーナリストに。NPO法人「コラボ」理事。著書に『自治体倒産時代』(講談社)、『新書』、『知事の仕事』(朝日選書)など。